

英語で授業ができる中高英語教員が 大切にしていること —インタビュー調査に基づいて—

高木亜希子(青山学院大学)

酒井英樹(信州大学)

加藤由美子(ベネッセ教育総合研究所)

福本優美子(ベネッセ教育総合研究所)

英語教師の資質や成長について

英語教師の資質や成長のありかたについて、理論をまとめたもの(英語科教育法のテキスト)や、調査研究(e.g. JACET教育問題研究会、2005)は複数ある。

問題の所在

1. 教師の資質や成長について、具体的に特性やエピソードがイメージできる質的調査はあまり行われていない。
2. 実際に英語で授業ができる中高英語教師は、何を大切とし、どのような学びを行ってきているのかについての研究はほとんどない。

ベネッセにおける調査

「第1回中学校英語に関する基本調査(教員調査・生徒調査)」(2009) 量的

英語科教員が抱えている課題例:

指導方法、コミュニケーション能力と他技能との関連、時間がほしい、自分自身のスキル、意欲・関心を持たせたい



「中高生の英語学習に関する聞き取り調査」(2013) 質的



「中高生の英語学習に関する実態調査」(2014) 量的

「教員聞き取り調査」(2014) 質的

▶ 研究課題

英語で授業ができる中高英語教員が
英語教師として大切にしていることは何か

<具体的には>

- ①指導で大切にしていること、教育観、生徒に身につけさせたい力は何か。
- ②現在までの学びや経験（英語学習経験、大学での学び、現職での学び等）がどのように①に寄与しているか。



指導力向上のヒントを探る。

- ＜実施時期＞ 2014年10月、11月
- ＜実施方法＞ 1人約60分
インタビュアー1名＋サブ1名
半構造化インタビュー
- ＜分析方法＞ TAE (Thinking at the Edge)

【中高英語教育研究会】

根岸雅史(東京外国語大学) 酒井英樹(信州大学) 高木亜希子(青山学院大学)
工藤洋路(玉川大学) 重松靖(国分寺市立第二中学校)
加藤由美子(ベネッセ教育総合研究所) 福本優美子(ベネッセ教育総合研究所)

主な質問項目

- ▶ 指導に関すること
指導で大切にしていること(理由、いつから、きっかけ等)
子どもに身につけさせたい力
印象に残っているエピソード
- ▶ 英語の先生になったきっかけ
- ▶ 大学での学び(英語関連、その他)
- ▶ これまでの英語学習経験
- ▶ 自己研鑽
- ▶ これまでの英語使用経験
- ▶ これまでの勤務校

対象者

文部科学省「新学習指導要領に対応した授業実践事例映像資料」
で授業実践をされている先生

中学

- ・土屋裕子先生（静岡県浜松市立江南中学校 DVD出演時：静岡県浜松市立南部中学校）
- ・杉光いづみ先生（佐賀県嬉野市立塩田中学校 DVD出演時：佐賀県鹿島市立東部中学校）
- ・川崎恵美子先生（青森県むつ市立田名部中学校）

高校

- ・植木明美先生（茨城県立竹園高等学校）
- ・津久井貴之先生（お茶の水女子大学付属高等学校 DVD出演時：群馬県立中央中等教育学校）
- ・亀谷みゆき先生（岐阜県立関高等学校 DVD出演時：岐阜県立東濃業高等学校）

TAEとは

Thinking at the Edge (TAE) : Gendlinら (Gendlin & Hendricks, 2004) が開発した理論構築法

「うまく言葉にできてないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統だった方法 (得丸、2010, p.5)」

得丸 (2010) が質的研究法として応用

分析過程

Part 1 (ステップ1~5) 「フェルトセンスから語る」

Part 2 (ステップ6~9) 「実例からパターンを引き出す」

Part 3 (ステップ10~12) 「理論を構築する」

5つのターム

子どもに寄り添う

子どもの学習状況、発達や興味・関心に寄り添うのは大前提にある。加えて、学校と日々の生活の両方の中で起こる、中高生の思春期独特の繊細な感情、いらだち、不器用さ、そういうものにも深い愛情を持って寄り添っている。

自らの成長

先生方は、まず自らの英語力を伸ばすために自己研鑽している。また、指導、授業運営の研究・実践・振り返りを行い、次の新しいチャレンジをしている。この繰り返しの中で、自らの教育観や指導観もどんどん発展・進化させている。

最善を求め続ける

「子どもに寄り添う」こと、「自らの成長」の両方に常に最善を尽くし、それを続けている。

1つの発言、1つの活動、1つの授業に最善を尽くすということと共に、10年後、15年後の先を見越して何をすべきかということも考えている。

英語を使う経験

単に留学をしたり、海外で生活をしたことがあるということではない。完全ではなくても伝えたいことをきちっと伝えようとする経験をしたことがある。英語を使って人とつながるということのすばらしさとか喜びを先生自身が体験されたことがある。そして、それを子どもたちに何とか伝えたい、経験してもらいたいと思っている。

変化

子どもの日々の小さな変化(元気がある、ないなど)に心を配るとともに、日本や海外で起こっていること、教育行政の新しい動きなどにも敏感である。また、自らが多様な学校で新しいことを経験したり、学びを求めて新しいことに挑戦することで、新しい価値観に触れながら、それを寛容に受け入れ、自らも変化しながら次のステップに進んでいる。

子どもに寄り添う

事例①中学B先生

●荒れる生徒と向き合う

→荒れる理由がわかる:勉強がわからなくなったから



学校が居場所ではない生徒のつらさを思う。

「だから、勉強できるようにしてあげたいと思ったんです。」

事例②中学C先生

●英語が苦手で態度悪く、反抗的な中学2年生の男子生徒。

向き合うことで生徒が書いた「僕の夢」

→ I want to be a farmer. I want to be like my father.

I respect him.



「まだ簡単な英語では、色々な言葉で飾ることができずにストレートに言わなくちゃいけない。だから、日本語では書けないようなことも書いてしまう。素直に言葉に出してしまう。」「(このようなストレートの気持ちに触れることができる)英語はラッキー」

自らの成長

事例③ 中学B先生

テストは子どもへのテストではなく、自らの指導へのテスト

事例④ 高校E先生

生徒に、学び続けることを伝えたいと思った時には、その教員そのものも学び続けていないと、できない。

最善を求め続ける

事例⑤高校E先生

常に一時間一時間の授業に勝負を賭けている。
生徒の一発言も聞き逃さないように。



聞き逃したらrecastもscaffoldingもできない。そこからの学び合いも出てこない。

英語を使う経験

事例⑥ 中学A先生

中学2年の春休みに、ロサンゼルスへ(21日間位)。
あのときはすごく度胸が座って話せたような気がする。
「あのころは間違えを恐れるなんてことはかけらもなかった。」

事例⑦ 中学C先生

母国(アイルランド)で教員になった元ALT。
その生徒たちと自分の生徒たちとをつなげた。
→人がつながるということを強く意識
→自分自身もその元ALTと親友に。



生徒にも人とつながってほしいという気持ちを持つようになった。

変化

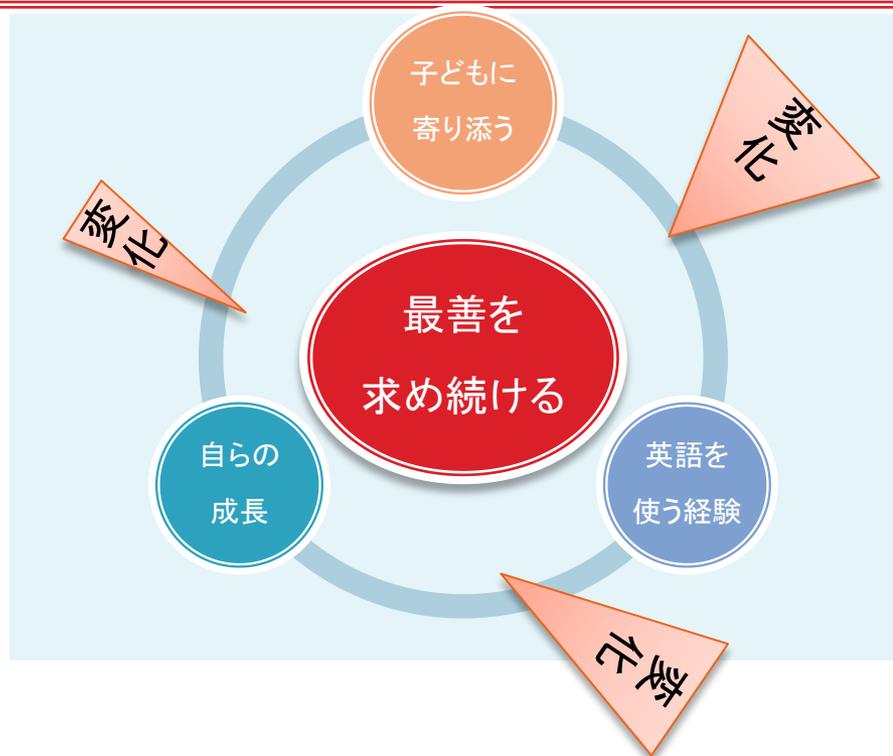
事例⑧高校F先生

教職課程では限られた科目を取ればよかった。
習ったことのないことを教えることになってしまった。
「私ぐらいの年代の英語の教員っていうのは大変な思いをしている」「習ったことのないことを教えることになっちゃった。」

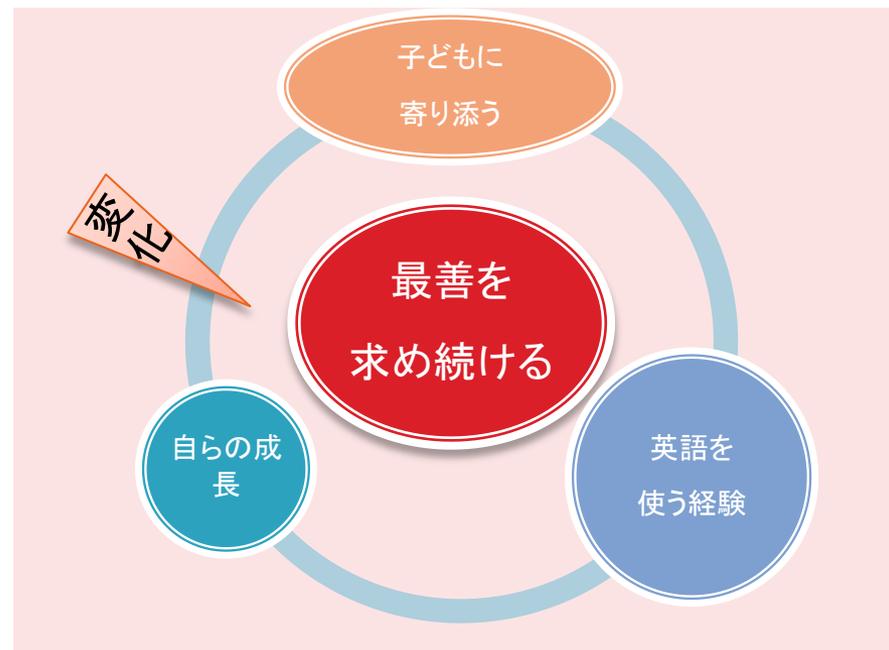
事例⑨高校F先生

ベルリンの壁が崩壊した時に衝撃を受けた。あり得ないと思っ
ていることも起こる。
これから大変な時代を生きる子どもたちのことを考える。
「身体ごと自分が対処しなきゃいけない、知らない急なことに、思
いもよらないことに、準備しておかないとだめ。不意打ちはくると。」

考察:5つのタームの関係をイメージ化したもの



先生によって、それぞれのタームの意味することや重さは異なる。



いろいろな「変化」の影響を受けながら、先生方は「最善を求め続ける」ということを軸にすえて「子どもに寄り添い」ながら日々の指導を行っている。そこに「英語を使う経験」、「自らの成長」のための努力の結果をそれぞれ関連させ、全体で循環させながら、教師として成長 (teacher development) し続けている。

インタビューにご協力いただいた先生方について

中学A先生

(女性)

旅行好き(国内で行ってない所がないくらい。)好奇心旺盛。
市で中心的な存在で研修等もしている。
英語を聞くことを大切にしている。指導スタイルはどんどん進化。
「いい」と思ったことはとりあえずやってみて、自分に合わなかったり、
ダメなときはすぐやめる。小2の時から英語の習いごと。

中学B先生

(女性)

高校生の時に自分の英語が外国人に通じたことが大きな喜びに。
(田舎にいるけど)世界に羽ばたける力をつけてもらいたい。
楽しく！わかる！力がつく授業を心がけ、子どもの成績に合わせて丁寧な手当てを愛情を持って行う。
ある英語教育の研究会に参加するため定例的に全国へ旅する。

中学C先生

(女性)

好奇心旺盛。英語はそれほど好きではなかった。
大規模校での指導歴が長い。1年間内地留学(大学で)。交換制度で
高校での指導経験も(1年間)。子どもへの寄り添いを大切にする。
音読や英作文のテーマなど、生徒の様子をみて柔軟に応じる。まだまだ子どもを見れていないという反省も。

インタビューにご協力いただいた先生方について

高校D先生

(男性)

大学時代に留学(1年間)。中学校、中高一貫校、行政の経験もある。それまでの環境からリセットし客観的になる「変化」があった。授業でしかできないことを授業の中核に据える。生徒がいい言語活動を行うことを越えて、主体的に学ぶこと、仲間と学び合う力を育てることを新たな目標にしている。

高校E先生

(女性)

大学のESSの追い込まれた状況で、言語を身に付けた経験を持つ。進学校での指導経験が長く、そこで実績を上げつつ、「英語を使う力」の育成も行う。国の仕事に関わることで視野が広がる。苦手な仲間ともきちんと議論できる人を育てる。英語よりもホームルームの授業の方が、生徒の人気が高いほどである。

高校F先生

(女性)

世の中の知識や世界情勢などに敏感。コミュニケーションにおいて、感情的にならないためにも、事実に基づき論理的に思考することが必要と考える。大学時代に留学(1年間)し、学習者に寄り添うことを学習者の立ち場から知る。子どもの発達や興味に寄り添い、「分かる」喜びを大切にする。